

## Ф.И. チュツチェフ政治詩試訳(2)

大 矢 温  
岡 部 由 佳  
小 林 慎 吾  
村 松 多恵子

### はじめに

前回に引き続き、六巻本全集のテキストを元にチュツチェフの政治詩の翻訳を試みた。

#### 1) オレークの盾<sup>1)</sup>

1

『アラーよ！ 我等に汝が光を降り注ぎ給え！  
敬虔なる信者の美と力よ！  
偽善の邪教徒への脅威よ！  
汝の預言者は、ムハンマドなり！……』

2

『嗚呼、我らが砦よ、要塞よ！  
偉大なる神よ！ 今ぞ我らを率い給え。  
かつて汝が、砂漠において  
己が選民を率いたごとく！……』

人の寝静まった深夜！ 皆沈黙している！  
月が突然……黒雲の陰から輝き、  
イスタンブールの城門の上で  
オレークの盾を照らし出した。

初出はモスクワの文学雑誌『ガラテヤ』1829年34号で、この号に検閲の許可が下りたのは1829年8月22日だった。このことからこの詩はこれ以前に書かれたと考えられる<sup>2)</sup>。イスラム教とキリスト教、そしてイスタンブールの占領をテーマにしている。

このようなテーマの背景はトルコ帝国領内のキリスト教住民の独立運動を契機とした第四次露土戦争である。

ナポレオン戦争以後、19世紀のヨーロッパは革命と独立を抑圧してヨーロッパ列強間の協調によってヨーロッパの地域秩序を確立しようとしたウィーン体制の正統主義もとにあった。しかし、このような状況の中にあっても、異民族の支配に呻吟するキリスト教住民はギリシアの独立を勝ち取るための運動を続けていた。当初、ギリシアの独立運動を「合法秩序に対する反乱」として認めなかったロシアのアレクサンドル一世も、やがて正教の保護者としての立場からトルコに対する態度を硬化させる。他方、トルコ帝国内のギリシア系住民の独立運動が活発化する中で、ヨーロッパ列強はこれに東方問題の活路を見て先を争って独立支持へと回った。英仏露三国は1827年のロンドン会議を開催し、共同してこの問題に介入することを確認し、ギリシア独立を支持する立場からトルコに対しては武力行使の停止を提案する。このような動きは当然のことながらトルコの反発を招き、1827年10月にナヴァリノにおいて三国連合艦隊とトルコ・エジプト軍の艦隊の間で戦端が開かれる。ロシア、トルコ両国の関係も、トルコのスルタンが1826年のアッケルマン条約を破棄した上でロシアに対する「聖戦」を宣言したのに呼応してロシア側も翌28年4月にトルコに宣戦を布告するにおよんで、名実共に第四次露土戦争開戦へと動く。

さて、このような流れの中で、当時ミュンヘンにおいてロシア外務省の外交官として勤務していたチュツチェフは、新生ギリシアの国王としてバイエルン王ルートヴィヒの次男、オットーを擁立しようと1829年後半、ミュンヘンを舞台に策を巡らせ、深くギリシア独立問題に関与している<sup>3)</sup>。

その後、第四次露土戦争はロシア側の優勢のうちに進み、ロシア軍は、この詩が書かれたと思われる1827年7月末にはイスタンブール北西約200 kmのスリヴィノを攻略、さらに8月にはイスタンブールの攻略も視野に入れてイスタンブール北西約100 kmのアドリアノープルに向かって進軍していた。

他方この詩は、一聯目がテーゼとしてのイスラム教徒、二聯目がそのアンチテーゼとしてのキリスト教徒、そして三聯目がそれらのジンテーゼとしてのイスタンブール占領、という三段論法の形式をとっている。

月と星をイスラム教のシンボルと考えると、「突然、黒雲の陰から」輝き出した月が照らし出した озарила「オレークの楯」、とは、イスタンブールに対するトルコの不当な影響力を撃退する отразить ロシアの武力と読みとることができよう。

オレークについては、ロシアによるイスタンブール奪回の文脈で別の詩でも言及がある<sup>4)</sup>。とはいえ、オレークのギリシア遠征は907年のこととされているので、これはルーシの洗礼前のことである。つまりこの詩は、イスラム教とキリスト教の対立という同時代的な状況をふまえた上で、第四次露土戦争の有利な戦局に鼓舞されたチュツチェフが、オレークの記事を引き合いに出してイスタンブールに対するロシアの潜在的領有権を主張したものと読みとれよう。

## 2) 皇帝ニコライ1世へ〈ドイツ語から〉<sup>5)</sup>

おおニコライよ、諸民族の勝利者よ、(原文斜体)<sup>6)</sup>

汝はその名にふさわしい！ 汝は勝てり！

主によって戦士とされた汝は、

その敵の暴虐を鎮圧した……

苛酷な試みの終わりが訪れ、  
名状しがたい苦悩の終わりがやって来た。  
    歡喜せよ、キリスト教徒たちよ！  
    汝らの神が、慈悲と戦<sup>いくさ</sup>の神が、  
血まみれの王笏を冒瀆者の手から引き抜いた。

その命令の使者である汝は —  
神が手ずから、恐ろしき剣を渡した汝は —  
死の陰から神の民を導き出して  
積年の鎖を永遠に断ち切るべし。  
おお、ツァーリよ。選ばれし汝が頭<sup>こうべ</sup>の上に  
太陽のごとく神の恵が輝きだした！  
    汝の前で、淡い  
    月は闇へと隠れた —  
コーランの支配は、復活させるべきではない……

汝が怒りの声を遠方で聞き、  
オスマンの城門は震えた：  
汝が手の一振りだけで —  
キリストの足元に崩れ落ちるだろう。  
己が仕事を成し遂げよ、人々の救済をせよ。  
「光あれ」と唱えよ — さらば光あらん！  
    もうたくさんだ、流される血と涙は  
    もうたくさんだ、虐殺された妻や子供たちは  
もう十分にムハンマドはキリストに悪態をついた！……

汝が心は世間の名声を熱望せず、  
汝が視線が向けられしは、この世のものにあらず。

だが、おおツァーリよ、列強をお支えなさる「その方」が、(原文大文字)  
汝が敵にその判決をのたまった……

その方は「自ら」、(原文大文字) その御顔を彼らからそむける、  
血は久しく、彼らの邪悪な権力の根元を洗い、  
彼らの頭上を死の天使が徘徊し、

イスタンブールは滅び――

「コンスタンチノーブル」(原文斜体) は再び甦りつつある……

ミュンヘン国王ルートヴィヒ一世の作とされるドイツ語の詩を、当時ミュンヘンのロシア公館に勤務していたチュツチェフがロシア語に翻訳したもの。モスクワにあるロシア帝国外交資料館のアルヒーフ資料の中にミュンヘン公館の外交文書の一部としてルートヴィヒの作とされるドイツ語の詩が印刷された新聞の切り抜きが保存されている。しかしそれが、いつ、どのような場所で発表されたものかは確認できていない<sup>8)</sup>。第四次露土戦争がアドリアノーブル講和条約によって終結したのが1829年9月2(14)日、そして外務大臣ネッセリローデに宛てられたミュンヘン公使ポチョムキンのこの外交文書の日付が1829年10月12(24)日なので、チュツチェフによってこの詩が翻訳されたのはその両者の間と考えられる<sup>9)</sup>。

ニコライ一世に大きな期待をかけていたルートヴィヒの詩を訳していることから、チュツチェフもまた、ニコライに期待していることが伺えるが、現実のニコライ一世の治世はチュツチェフを失望させるものだった。後にクリミア戦争の敗戦に際してチュツチェフはニコライ一世を「お前はツァーリではなく、はったり屋だった」と罵倒している<sup>10)</sup>。

### 3) アルプス山脈<sup>11)</sup>

夜中の群青色の薄明かりを通して  
雪化粧のアルプスは眺めている――

死人のように蒼白なその瞳は  
氷の戦慄で撃つ――  
何かの力に魅惑され、  
「朝焼け」(原文大文字)が昇るまで  
佇んでいる、峻厳な霧のアルプスは、  
まさに倒れしツァーリなり！……

しかし、「東」(原文大文字)が真紅に染まるや、  
破滅的な魔法には終焉が――  
最初に空に輝くは  
長兄の冠。  
そして大いなる兄から  
小さきものへと細い流れが走る、  
そして金の冠を載いて輝いている  
復活した「家族」(原文大文字)すべてが！……

1830年の作とされている<sup>12)</sup>。一見、アルプスの自然を詠んだ詩のようだが、当時チュッチェフがギリシア独立運動を機に民族の問題に着目するようになったことを考慮するなら、この詩の中にスラヴの問題を見出すことは難しいことではない。

既に述べたように、チュッチェフの詩において月と星はイスラム教を表すシンボルとして使用されている。ここから、この詩において夜をイスラム教の支配と読み替えると、この詩は長兄ロシアを先頭にしてスラヴの「家族」が夜の支配から解放される、という筋書きを読みとることができよう。

ここで注目すべきは、「破滅的な魔法」たるトルコの支配の「終焉」は、「東」の朝焼けから始まる、とチュッチェフが考えている点である。ギリシア独立問題に立ち返れば、異教徒からのギリシアの解放はイギリスやフランスといった「西」の列強ではなく、「東」の大国たるロシアによってもたらされるべきもの

であった。同じ文脈でトルコ帝国内のスラヴ系住民の問題に立ち返るなら、  
チュツチェフは、ヴァラキア、モルダヴィアなどの係争地域のスラヴ系住民も  
また、ロシアによって解放されなければならないと主張していることになる<sup>13)</sup>。

#### 4) 無題<sup>14)</sup>

あたかもしかり  
宛 然、愛娘をアガメムノンが  
神の受難に捧げしごとく、  
順風の嵐の息吹を  
怒りの天に求めつつ、――  
かくのごとく  
如 是、我等は悲しみに満ちたワルシャワの上に  
致命的な一撃を下せり、  
いざ買わん、その血塗られた代償で  
ロシアの保全と平静を！

しかし、我等から失せよ  
奴隷の手で編まれし誉れ無き冠は！  
ルーシの血が川となりて流しは、  
専制のコーランのためにあらず！  
否！ 我等を戦へと駆り立てしは、  
刀に宿る悪霊にあらず、  
ヤニチャル<sup>15)</sup>の手による蛮行にもあらず、  
刑史の従順さでさえもない！

別の想い、別の信仰が  
ロシア人の胸で脈打った！  
見せしめの救済の雷雨によって  
この大国の保全を守るべし、

スラヴの血縁者たちを

ロシアの旗の元へと糾合すべし

しからばすなわち  
然 則、蒙を啓きたる功績として<sup>16)</sup>

それは想いを同じくする者達を、軍勢のごとく統べるであろう。

まさにこの最高の意識が、

勇敢なる我等の民を導いた —

天の道の代償を

いとわず民は引き受ける。

民は感じる、己の頭上、

無限の高みに一つの星を

そしてたゆまずその星を追い

神秘の目標へと急ぐ！

兄弟の矢により貫かれし汝<sup>17)</sup>、

行く末に判決を下しつつ、

同種族の勇者よ、汝は

贖罪の焚刑に斃れた！

ルーシの民の言葉を信じよ：<sup>18)</sup>

汝の灰は、我等が大切に保管する、

そして我等すべての自由は、

フェニックス  
不死鳥のごとく、その中に生きるのだ。

1815年のウィーン会議の結果、ポーランドの大部分はロシア帝国に併合されながら、「会議王国」として一定の自治を認められていた。とはいえ、ポーランド再興を願いロシアからの独立を希求する愛国的ポーランド人は1830年11月にワルシャワで蜂起し、「国民政府」の成立を宣言した。当然のことながらポーランドの独立運動はロシア側の厳しい弾圧を招いたが、その後、ポーランドの



独立運動はヨーロッパの革命運動と緊密に結びつくことによってヨーロッパ史上に大きな意義を持つことになる<sup>19)</sup>。

1831年に書かれたこの詩においてチュッチェフは、ポーランドに対するこのような弾圧を、ギリシア神話に登場するミケネ王アガメムノンの故事を引き合いに出して正当化する。ギリシア軍を率いるアガメムノンはトロイア戦争において順風を得るためにその娘イーピゲネイアを神の生贄に捧げている<sup>20)</sup>。チュッチェフによれば、ワルシャワへの「致命的な一撃」は、「ロシアの保全と平静」という大儀のための、あたかも実の娘を生贄に捧げるがごとき「代償」であった。このようにこの詩においてチュッチェフは、ニコライ一世の弾圧策を擁護するのである。

一方ここで、ポーランドに対する武力の行使はロシアの保全のための正当な行為であり、そこで流された血は、「我等すべての自由」のために決して無駄にはならない、とチュッチェフが主張している点にも注目する必要がある。チュッチェフにとって武力鎮圧は、異民族による暴力的支配とは根本的に異なる。彼にとってそれは、反乱を起こしたポーランドの「蒙」を啓く肉親者による愛の鞭であった。

さらに「我等すべての自由」は「スラヴの血縁者たち」を「ロシアの旗の元へと糾合」することによってもたらされる、という思想は、「アルプス山脈」にも見られるがここでより明確に表明されており、後にトルコやオーストリア領内のスラヴ民族を視野に入れることによって、汎スラヴ主義へと発展する。

異教徒に対するキリスト教世界としてのヨーロッパ、ローマに対して正教を奉じる東ヨーロッパ、東ヨーロッパとスラヴ世界、そしてスラヴ世界とロシアの問題を考える上で、チュッチェフにとって、スラヴ民族でありながらカトリックを信仰し、ロシア帝国からの分離独立を志向するポーランドの問題は折に触れ立ち返るべき難問であった。

「オレークの盾」や「皇帝ニコライ一世へ」がキリスト教とイスラム教の対立を描いているのに対して、この詩ではキリスト教世界としてのヨーロッパの中でロシアによるスラヴの糾合がはじめて具体的に謳われている。

5) 無題<sup>21)</sup>

見よ、西が燃えさかる<sup>さま</sup>様を  
夕焼けの光によって。  
輝きを失った東は包まれた  
寒く、灰青色のウロコによって！  
彼らはお互いにいがみ合っているのか？  
あるいは、太陽は彼らにとって一つではなく、  
動くことなき層となり  
彼らを隔て、統一しないのか？

1838年の『同時代人』誌の第11号に発表された。この号の『同時代人』は7月1日に検閲を通過していることから、この詩が書かれたのは1838年前半のことと考えられる<sup>22)</sup>。

ヨーロッパ各地における自由主義や民族独立運動の高まり、そして恐慌による経済混乱といった西ヨーロッパ社会の動揺を目の当たりにして、チュツチェフはこの詩において「西」が「燃えさかる」と詠う。しかも「西」を燃やしているのは未来への希望を暗示する朝焼けではなく、終末へと続く「夕焼けの光」である。他方、「東」は「燃えさかる」「西」とは対照的に鱗雲に包まれて泰然としている。40年代のチュツチェフの政論において繰り返される、「西」の破滅と不動の「東」、というモチーフである。

ただし、ここで注目すべきは、チュツチェフがキリスト教という「太陽」を共に戴きながらなぜ、「西」と「東」を「統一しないのか」と問うていることである。「スラヴの血縁者たちを」「ロシアの旗の元へと糾合すべし」と詠ったチュツチェフの汎スラヴ主義は、東西ヨーロッパの統一を視野に入れることによって、汎ヨーロッパ主義ともいえる思想へと拡大する。

6) ハンカへ<sup>23)</sup>

離散して生きるべきか、我々は？  
すでに時が来たのではなからうか？  
目覚め、そしてお互い手と手を差しのべる —  
我等の血縁者と友人に？……

何世紀も<sup>24)</sup> 我等は盲人だった —  
そして惨めな盲人として、  
我々は漂泊し、我々は彷徨し、  
四散した、いたるところへ……

時折、さまざまな形で  
我等が衝突せざるを得なかったとき  
一度ならず、血は川のごとく流れ、  
剣は血を分けたものの胸を引き裂いた……

そして理性なき反目の種子は  
百倍もの実をもたらした：<sup>25)</sup>  
一つならず種族が絶えたか  
あるいは異境へと去った……

異教徒、異邦人は  
我等を脇へ寄せ、打ち砕いた —  
ドイツ人はそれらの言葉を根絶し  
トルコ人はこれらを辱めた……

ほら、この暗い夜の中で、  
このプラハの高台で、  
この善き人が謙譲の手により  
灯台に灯をともし、暗がりです——

嗚呼、何という光線によって  
突然に照り映えるのか、隅々まで！……  
我等の前に暴かれたのは  
すべての「スラヴの土地」(原文大文字)！……

山々、平原そして沿岸部  
奇跡のような日が輝く、——  
ネヴァ河からモンテネグロへ、  
カルパチア山脈からウラルを越えて……

ワルシャワの上に夜が明け<sup>26)</sup>、  
キエフは瞳を開いた  
そして金色屋根のモスクワと  
ヴィシエグラード<sup>27)</sup>は語り始めた……

そして親族の言葉の響きが  
再び我等に分かりはじめる……  
現<sup>うつつ</sup>に見る、孫達は  
父が夢見ていたものを……

〈追記〉

このように訴えたのだ、私は、このように宣言したのだ、私は。  
それから三十年が過ぎ去った——

努力はますます根強くなり、  
悪はますます執拗になった。

今、神の前に立ちたる汝、  
正しき人よ、聖なる影よ<sup>28)</sup>、  
汝の全人生は担保となれ、  
望まれし日の来たらんことの。

終わりなき戦いにおいて、  
汝の揺るぎなきことに対して  
全スラヴ (原文斜体)<sup>29)</sup> 最初の祝日が<sup>30)</sup>  
汝への進物とならん。

1841年にプラハを訪問したチュツチェフは、チェコの作家でチェコの民族復興運動の活動家であったヴァツラフ・ハンカ (1791-1861) に暖かく迎えられてチェコ、およびスラヴ民族の歴史に接し、スラヴ民族の過去と未来に思いをはせている<sup>31)</sup>。

この詩は、1841年9月6日(新暦)に二度目にハンカの家を訪問した際に、感謝の印としてチュツチェフがハンカのアルバムに記したもので、「追記」の部分は、1867年のスラヴ会議にあわせて書かれたものといわれている<sup>32)</sup>。

この詩において、スラヴの統一やオーストリア・スラヴの解放について詠われているが、その際、正教徒ではないポーランド人やチェコ人もスラヴ人に含まれている点に注意する必要がある。

## 7) 旗と言葉<sup>33)</sup>

血まみれの嵐へ、戦<sup>いくさ</sup>の炎をくぐりて  
救済の先駆 — ロシアの「旗」(原文大文字) は

不死の勝利へとお前を導いた。

驚くべきことだろうか、神聖な同盟にちなんで<sup>34)</sup>

ロシアの「旗」(原文大文字)に続いて、ロシアの言葉が  
お前に、あたかも親族が親族へ、来たことが？

ベルリン国立古文書館に保存されている直筆の日付から、1842年6月25日(新暦の7月7日)の作とされている<sup>35)</sup>。ドイツの作家でロシア文学の翻訳に功績のあったカール・アウグスト・ファルンガーゲン・フォン・エンゼ(1775-1858)に捧げられたもの。エンゼはロシア軍に従軍してナポレオンのフランス軍と戦った経歴を持つ<sup>36)</sup>。

チュツチェフはこの詩において、対ナポレオン戦争でロシアの軍旗がエンゼを勝利へと導いたのと同様に、今度は翻訳の分野でロシア語がエンゼを導くであろうことを祈念している。ナポレオンのフランス軍からの解放という点にドイツにおけるロシアに対する共感を見るのは、40年代の一連の政論『ロシア人の手紙』、『ロシアとドイツ』を貫くチュツチェフの現状分析である。

## 8) ロシア人から(ミツケーヴィッチ氏の講義の抜粋を読んで)<sup>37)</sup>

天の皇帝の祝福よあれ

汝の善き企図に — <sup>38)</sup>

疑問の余地なき天職の人

和解をうながす愛の人……

無為に汝は古着をば

肩から脱ぎ捨てたわけではない、威勢良く。

神は勝てり — 両眼に視力が戻った。

汝は「詩人」だった — 汝は「預言者」(原文大文字)となった……

我々は「光」(原文大文字)の近づきを感じる —  
そして靈感に満ちた汝の「言の葉」(原文大文字)は、  
新約聖書の使者のように、  
「スラヴの全世界」(原文大文字)を巡った……

我々は「光」(原文大文字)を感じる — すでに「その時」(原文大文字)  
は近い —  
最後の砦は粉碎された、—  
跳ね起きよ、つながりなき種族よ<sup>39)</sup>、  
一つの「民族」(原文大文字)へと結合せよ —<sup>40)</sup>

跳ね起きよ — ポーランドでもなく、ロシアでもなく —  
跳ね起きよ、「スラヴの家族」(原文大文字)よ! —  
そして眠りを払い落として、はじめて —  
言葉を口にせよ:「私だ!」と —

超自然的に自らの内の  
敵意を癒すことができる、汝よ —  
晴れた心の上に  
神の恩恵が横たわらんことを!

1841年6月末にチュツチェフは「休暇からの不到着」を理由に外務省を公式に解雇され、「侍従」の位も剝奪されている。しかし彼は、外務省から解雇されたおかげでより自由に行動することができるようになった。折しも1840年の末からパリのコレージュ・ド・フランスで亡命ポーランド人アダム・ミツケーヴィッチがスラヴ文学の講義を講義しており、これが大きな評判を呼んでいた。

この詩は、ミュンヘンでツルゲーネフから送られた講義録を読んだチュツチェフが、ロシア語で書いてミツケーヴィッチに送ったもの<sup>41)</sup>。

ミツケーヴィッチはポーランドのローマン派詩人として知られるが、ポーランド独立運動の活動家でもあった。それにもかかわらず、講義の内容はタタールとの戦いにおけるロシアの意義を西欧の救済と位置づけるなど、反ロシア的とは縁遠いものであったといわれる<sup>42)</sup>。このような点にチュツチェフが着目して、ポーランド人の中における親ロシア派の橋頭堡としてミツケーヴィッチを評価した可能性もある。

ただし、ミツケーヴィッチをソルボンヌ大学の教授と思い違いするなど<sup>43)</sup>、チュツチェフが彼をよく知らなかった可能性もある。

### 注

- 1) “Олегов щит”, *Тютчев: Полное собрание сочинений и письма в шести томах*, М., 2002-, (далее *Тютчев*), т. 1, с. 71.
- 2) См. “Комментария”, *Тютчев*, т. 1, с. 332.
- 3) この間の事情については、大矢「Ф. И. チュツチェフとギリシア独立問題」、中央大学法学会『法学新報』、平成18年、第112巻第7・8号参照。
- 4) 「無題」(いや、私の一寸法師よ……) 大矢他「Ф. И. チュツチェフ政治詩試訳(1)」、『文化と言語』、2005年第63号、88-89ページ、参照。
- 5) “Императору Николаю I”, *Тютчев*, т. 1, с. 72.
- 6) 「ニコライ」という名前はギリシア語で「諸民族の勝利者」という意味を持っている。
- 7) Реки は Рекать の命令形。
- 8) АВПРИ ф. 133, Канцелярия, оп. 468, N8086, 12(24)/X 1829 г., N45. チュツチェフに関するアルヒーフについては、大矢「ロシア帝国外交資料館におけるチュツチェフ関係資料」、『文化と言語』、2005年、第63号、参照。
- 9) См. “Комментария”, *Тютчев*, т. 1, с. 333.
- 10) 「無題 (ニコライ・パヴロヴッチに)」、「政治詩試訳(1)」、90ページ参照。



- 11) “Альпы”, *Тютчев*, т. 1, с. 129.
- 12) См. “Комментария”, *Тютчев*, т. 1, с. 392.
- 13) 1829年のアドリアノーブル条約でロシアはトルコと共にこれらの公国の保護権を認められていたが、クリミア戦争敗戦後のパリ講和条約でこの権利は放棄させられている。大矢「クリミア戦争とゴルチャコフ外交」、中央大学法学会『法学新報』、平成12年、第107巻、第3・4号、112ページ参照。ミュンヘンでドイツのヴィザンチン学者ファーリメライエル (Fallmerayer, J. F.) と親交があったチュツチェフは、ギリシア人もスラヴ系民族だとする彼の説を信じていたと考えられる。См. Пигарев, К. В., “Ф. И. Тютчев и проблемы внешней политики царской России”, *Литературное наследство*, т. 19-21, с. 192.
- 14) “\*\*\*”, *Тютчев*, т. 1, с. 145-146.
- 15) トルコの親衛兵のこと。
- 16) このようにチュツチェフにあっては、ポーランド鎮圧はポーランドの誤った意識を善導する教育的な措置としてとらえられている。
- 17) ポーランド人へ呼びかけている。
- 18) 以下はルーシの言葉。
- 19) 11月蜂起の意義については、ステファン・キェニエーヴィッチ編加藤一夫、水島孝生共訳『ポーランド史2』恒文社、73～74ページ参照。
- 20) この悲劇については「アウリウスのイーピゲネイア」、田中美知太郎他編、『ギリシア悲劇全集』第四巻、人文書院、425-475ページ参照。
- 21) “\*\*\*”, *Тютчев*, т. 1, с. 181.
- 22) См. “Комментария”, *Тютчев*, т. 1, с. 465.
- 23) “К Ганке”, *Тютчев*, т. 1, с. 188-189.
- 24) 原文は веки。チェコ人のハンカに捧げた詩なので、あえて現代ロシア語の文法を無視して古スラヴ語の響きを持たせようとしたとも考えられる。
- 25) 新約聖書ルカによる福音書第8章8節に「百倍もの実」が出てくる。
- 26) 最初は「ルーシはワルシャワを始末し」だったが時節柄表現を弱めたとい

われている。См. “Комментария”, *Тютчев*, т.1, с. 475.

- 27) ブダペスト北方約 20 km にあるハンガリーの都市。ここで 1335 年にハンガリー王カール・ロベルトの仲介でポーランド王カジミール三世とチェコ王ヤン・リュクセンブルクとの間で和議が成立した。
- 28) 神聖な生活を送っていれば本人が意識しないでも周囲に善を及ぼすことになる、というロシアの説話に、天使から奇跡の影を授かって本人も気づかないうちに善を広める「聖なる影 Святая тень」と呼ばれる徳の高い僧が登場する。
- 29) 原文は *Всеславянство*。
- 30) 1867 年のスラヴ会議については大矢「チュツチェフと 1867 年スラヴ会議」、『ロシア思想史研究』成文社、2004 年、第 1 号、参照。
- 31) См. Жакова, Н. К., *Тютчев и славяне*, С-Пб, 2001, с. 7.
- 32) См. “Комментария”, *Тютчев*, т. 1, с. 478.
- 33) “Знамя и слово”, *Тютчев*, т. 1, с. 190.
- 34) 対ナポレオン戦争後の 1815 年にロシア皇帝アレクサンドル一世の提唱でロシア、オーストリア、プロイセンの間で神聖同盟が結成された。
- 35) См. “Комментария”, *Тютчев*, т. 1, с. 478.
- 36) См. там же, с. 478-479.
- 37) “От русского по прочтении отрывков из лекций г-на Мицкевича”, *Тютчев*, т. 1, с. 191.
- 38) 神が祝福するように、とミツケーヴィッチに呼びかけている。
- 39) племя: 今の言葉で言えば「民族」。
- 40) Народ: 今の言葉で言えば「国民」。
- 41) См. *Литературное наследство*, т. 97, кн. 1, с. 173-174.
- 42) См. там же, с. 173.
- 43) См. там же, с. 175.